大谷學報　第二十二卷　第三號

獨逸印度學界の現狀

龍山章眞

一

歐米に於ける東洋研究の中において、印度學は相當重要な位置を占めてゐる。卽ち埃及・アッシリヤ・バビロニヤ・エルサレム等を含むいはゆる近東と、支那・蒙古・滿洲・日本・佛印等を含む極東との中間に位して、印度文化圈の含む廣大なる地域、卽ち印度本土を初め、南はセイロン、東はビルマ・タイ・馬來半島・スマトラ・ジヤヴに及び、北はチベットから遠く中央亞細亞にいたり、西はアフガニスタン・イラーンの地に及ぶ地域、それが印度學の取扱ふ地理學上の領域である。從つて研究者の數においても、關係文獻の量においても、東洋研究中の一大部門を形造つてゐる。

然らばこの印度學は、獨逸の各大學において如何なる科目中に位置せられてゐるであらうか。先づ現在の各綜合大學（Universität）はすべて國立であるが、過去の聯邦政治の遺形として、國內の各地に分散しており、最近に領土に加へられた地域を合して、その數は三十位に及ぶであらう。これらの綜合大學の外に各種の單科大學（Hochschule）があり、工科・農科・師範科・醫科・獸醫科を數へ、又音樂學校・體操學校等も別に設けられてゐる。綜合大學の科目內容は大小によつて相違するが、最も完備せるものと見られる伯林大學を例にとれば、神學科・法學科・醫學科・哲學科・數學自然科學科・農學科・獸醫學科の七科が數へられる。又獨逸の綜合大學中、創立の古きこと第二番目といはれるライプチヒ大學においては、神學科・法學科・醫學科・獸醫學科・哲學科の

五科であるが、實は哲學科の中に言語學歴史學の部と數學自然科學の部とを分つて、實質的には六科となつてゐる。哲學科の中に數學自然科學を含む點は一見奇異のやうであるが、これは同大學の創立された西紀第十五世紀頃の考へ方を殘してゐるもので、當時の數學や自然科學的研究は哲學の一部門をなしてゐたのであるが、その後獨立の內容を有するにいたつても、依然として哲學科の一部として殘つてゐるのである。此事實は同大學の古い歴史的傳統を誇る一面として、誠に興味深い點である。尙序でながら、獨逸の各綜合大學にはすべて今日においても神學科が存在してゐるのは注意を索く點であつて、獨逸民族信仰を鼓吹するナチス治下において、傳統的神學は依然として行はれてゐる。勿論その內容において、基督教の福音的信仰と獨逸民族信仰との調和といふが如き新しき課題をも與へられてはゐるが、聖書や教理や教會史の研究、乃至は傳道法などを主とする神學が中心であつて、教會の牧師養成機關としての役割をなしてゐるものと見られる。

さて印度學は哲學科の中に含まれ、多くは東洋言語學(Orientalische Philologie)の一部門を形造つてゐる。例へば伯林大學では「印度言語學」(Indische Philologie)の名稱で呼ばれ、ライプチヒ大學では「印度學及びイラン學」(Indologie und Iranistik)として設置せられ、又ミュンヘン大學では「インドゲルマン言語學」(Indogermanische Philologie)といふ名稱が與へられてゐる。いづれも言語學の一部門をなしてゐるが、實際には言語のみならず、內容的に見て歴史・哲學・宗教・美術・考古學・民族學等にも及んでゐる。惟ふにいかなる場合にも、或る國の言語を解せずしては眞にその國の文化を語る資格はない筈であるから、この立前からすべての研究の基礎學として言語學的素養を具へなければならぬ。此故に言語學的研究を第一とし、他の文化の研究はこれから派生するものと見做される。かゝる意味において東洋研究一般が東洋言語學の名の下に總括せられるのであり、從つて印度學も印度言語學乃至はこれに類似の名稱が與へられてゐるのである。從つて單なる好事家は論ぜず、いやし

くも印度學の研究者であるかぎり、印度の言語に通ずることは不可缺の要件である。佛教研究に就いて見ても、歐米の佛教研究者はすべてかゝる意味での印度學者であるから、原典研究においても、思想研究においても、その研究法の着實なる點、その讀書力の優れたる點、研究上の視野の廣きにわたる點などにおいて、日本の佛教研究者よりもはるかにすぐれてゐる。視野の狹い日本の佛教學者は、印度思想がすべて佛教思想であつたやうな錯覺におちいりやすいが、この點についての反省を我々に與へるものと思ふ。

しかし他面から見る時は、特に印度思想の特殊な性質に原因して、彼等歐米の學者の思想的理解が正當でない場合もしば〳〵おこつてゐる。卽ち歐米の學者はその分析的概念的な理解法のわくに當嵌めて、綜合的・直觀的な印度思想をむやみに切開したり、繼ぎ合せたりする癖がある。從つて印度思想の生命的・活動的方面は全く沒却せられて、彼等學者自身の思想體系を以て印度思想を叙述するが如き結果にも立至つてゐる。例へばドイツセンなどにはこの傾向が可なり強くあらはれてゐる。しかし一般的に見て、言語學を基礎學とせる歐米の研究法は大體に正しいと見られる。

二

さて獨逸の印度學の現狀を述べるについては、その過去の模樣を少しく回顧しなければならない。過去とのつながりなしに現在はありえないし、まして今の場合過去の隆盛時代を通つて現在の幾分沈退せる狀態に立至つてゐるのであるから、過去の優れた先人を回顧することは現狀に對する批判の基礎となるものであるから。

獨逸の印度學は概括的に見て、十九世紀後半から第一次歐洲大戰迄が、その最も隆盛であつた時代と見られる。その前の半世紀は大體準備期間であり、歐洲大戰直後は極度に衰退したが、最近に少しく盛返した觀があつた。しかし第二次の大戰によつて再び衰微に陷るであらうことが豫想される。

獨逸において最初に印度研究を初めたのはシュレーゲル兄弟であつた。一八〇八年に弟のフリードリッヒ・シ

ュレーゲルが、"Über die Sprache und Weisheit der Inder"（印度人の言語と叡智とに就いて）なる論文を發表したのが印度研究の最初であつて、次で兄のウィルヘルム・シュレーゲルが一八一八年にボン大學に於て最初の印度學講座を開設した。更に彼は五年後にバガヴッド・ギーターのラテン語譯を發表したが、これより印度研究者が續出するにいたり、又文藝家・音樂家などの印度に對する關心も非常に昂められた。北歐の陰鬱な空の下にあつて乏しい太陽を貪らねばならない彼等の眼には、陽光燦として降り注ぐ熱帶印度は、まことに地上の樂園として映じたにちがひない。

その後輩出した印度學者の中で優れた人々を列記するならば、先づアルブレヒト・ウェーバー(Albrecht Weber)に第一指を屈しなければならぬ。彼は一八五〇年より一八七八年にわたつて「印度研究」(Indische Studien)十八卷を順次に刊行し、その中には印度の言語・歴史・宗教等に關する原典並びに研究が登載されてゐる。この中でリグ・ゼーダの原典出版を完成したアウフレヒト（Aufrecht)は、ゼーダ研究に功績が高い。他面ベートリンク(O. von Böhtlingk)及びロート(E. Roth)は梵語學上に寄與するところ甚だ多く、特に兩者共編の「梵獨大辭典」(一八五五—七五)は印度學に一時期を劃した大勞力であつた。梵語學の言語學的研究を繼承した學者としては、カッペラー(C. Cappeller)、ツァハリエ(Th. Zachariae)、ロイマン(E. Leumann)、ウィンディッシュ(E. Windisch)などがあり、特に印度俗語の研究においてはピッシェール(R. Pischel)、ヤコービ(H. Jacobi)が秀でてゐる。

他方ゼーダの研究者としては、上述の外にゲルドナー(K. F. Geldner)、オルデンベルク(H. Oldenberg)、グラッスマン(Grassmann)など枚擧に遑なき程であるが、宗教・哲學の思想的研究者は割に少なく、ドイッセン(P. Deussen)、ヤコービ、ガルベ(R. Garbe)などを數へるにすぎない。特に佛教に關してはオルデンベルクが傑出してをり、かの歴史的名著「佛陀」及び「奥義書の教義と佛教の始源」を著はし、南傳律藏を校訂出版するなど、獨歩の行績を殘してゐる。又ロイマンも中亞關係の佛教

寫本の研究に多くの功績が見られる。ヤコービは耆那教の研究において、ガルベは數論哲學の領域において、それ〴〵他の追隨を許さぬ學匠であつた。

文學方面では、上述のウェーバーは初めて「印度文學史」を體系的に叙述し、これをうけてカッペラー、ビューラー(G. Bühler)などがあらはれ、更にウィンテルニッツ(M. Winternitz)が出でて彼の「印度文學史」三卷（一九〇七—二〇）の大著によつて、從前の研究を集大成したのである。又ビューラーは一八九六年以來「インドアールヤ言語學及び考古學の綱要」と名づくる大叢書の發刊を企て、獨逸を主とし各國の學者の協力を得て、印度學の全領域にわたる各綱要書を次々と出版してゐる。ビューラーの死後にも續いてこの事業は行はれ、キールホルンが之を繼承し、現在はリュダースとワッカーナーゲルが編纂者であり、近くはシューブリンクの「耆那教の教理」が出版されたが、未だ完成には至つてゐない。

印度考古學も亦印度學の重要なる一部門であるが、獨逸においてはフルチュ(E. Hultzsch)、グリュンウェーデル(A. Grünwedel)などが出てゐる。印度の法典に關しては、ビューラー及びジョッリー(J. Jolly)などの名をあげうる。ジョッリーは又印度醫學についても著作が存する。

以上に述べたところは、大體十九世紀後半から第一次歐洲大戰頃迄の間における獨逸印度學界の大勢であり、蘭菊その美を競ふ盛觀を呈してゐる。そしてこれらの人々はすべて故人であるが、當時より活躍してなほ現存する人には、リュダース、ワッレーザー、ガイガーなどがあり、其後を承けた人々が現在の學界に於て中心をなしてゐる。現存の人々については後に詳しく述べるであらう。

三

第一次歐洲大戰頃迄の歐米における東洋學の研究は、極めて旺盛であつて、英・獨・佛・米・露の各國にわたつて多くの學匠が輩出した。印度研究においても亦然りであつて、獨逸においては前述したる如き巨匠が、各々專門の領域に素晴らしい成果を擧げたのである。然るに大戰勃發後、獨逸の國内狀勢の變化に從つて、東洋學一般に凋落の傾向を辿つたのは、またやむをえないことで

あつた。殊に大戰終了後物資の缺乏の爲に研究書及び研究雜誌の出版さへ困難となつた。かの「獨逸東洋學會誌」(Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft)の如き、數十年の輝かしい傳統を誇る大雜誌も遂に組織變更のやむなきに至つた。しかしかゝる國内の疲弊混亂の中にあつても、自己の研究に忠實な小數の學者は研鑽を怠らなかつたが、報ひられるところは極めて少かつた。そして彼等の努力によつて東洋研究も次第に回復の緒につき、前述の「獨逸東洋學會誌」の衰微を補ふ意味もあつて、一九二二年から「印度學イラン學研究」(Zeitschrift für Indologie und Iranistik)が發刊されて、一九三六迄に全十卷を發行し、又「大亞細亞誌」(Asia Major)も一九二四年から發刊されて一九三五年迄に全十卷を發行してゐる。これらの兩誌は其後は廢刊されるにいたつたが、前者は印度學を中心とする研究雜誌であり、後者は印度・支那・日本などの地域に關する研究雜誌であつた。更に佛教に關しては「佛教學雜誌」(Zeitschrift für Buddhismus)が發刊せられ、一九一九年より二六年迄に、全七卷を發行した。この雜誌は巴利語學の泰斗W・ガイガー教授主筆の下に、大戰後の混亂した獨逸思想界に興り來つた佛教運動において、旺盛な活躍をなしたのである。從つてその内容は研究と宣傳とを相半ばしたものであつた。更に前述した「獨逸東洋學界誌」も、一九二二年より新系列として卷數を改めて發刊されるに至つたが、昔日の盛觀には比すべくもないが、其後次第に隆盛に趣きつゝある。又一八八七年以來ウィーンにおいて發行されてゐた「維納東洋學術誌」(Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes)も、大戰前には豐富な研究者のスタッフを誇つてゐたが、一九一八年第三十卷を以て大戰後休刊のやむなきに至つた。其後一九二四年に至り、米國方面から資金を借りて漸く再刊されるやうになり、今日に及んでゐる。本誌は東洋學の研究雜誌として極めて重要なものである。又東洋學關係の文獻の紹介批評を役目とする「東洋學文獻誌」(Orientalistische Literaturzeitung)も、古い歴史を持つ貴重な雜誌であり、現在ライプチヒに於て月二回宛定期的に發行されてゐる。

以上は種々の東洋學雜誌に就いて、第一次大戰後の模様を眺めたのであるが、研究者に就いて見ても、大體同様に言ひうる。卽ち第一次大戰後の極度の衰退から、次第に東洋研究の復活を見るやうになり、各大學における教授陣容も一應整備されるやうになつた。一九三三年ナチス政權が樹立されて以來、學界・思想界の模樣も甚しく改變されたが、民族主義の勃興と共に國際主義は却けられ、從つて東洋研究の如き國際的傾向の强い學問は閑却され勝ちになるのも亦やむをえないことである。それと同時に逼迫せる社會的國際的狀勢は、かゝる比較的實利にうすい學問の領域に、第一流の人物を迎へ入れることが出來にくいから、自ら斯學の衰退を招くにいたる點も考慮されねばならぬ。しかしとにかく一九三八年現在、自分が獨逸に留學してゐた當時において、獨逸の全綜合大學における印度學の現存教授は左表の如くであつた。卽ち オースタリー・チェッコ・ポーランドを含まぬ舊獨逸領內の全二十三大學の中、印度學講座の開設されてゐるのは十五大學に及び、其中二箇所を除いてはすべて正教授が任命されてゐる。(これを當時の日本學講座數に比較すれば、日本學講座の開設されてゐたのは、ベルリン・ハムブルク・ライプチヒ・ボン・フランクフルトの五大學にすぎず、しかも正教授としてはハムブルクのグンデルト教授唯一人といふ淋しさであつた。勿論歷史の新しい日本學と百年以上の歷史を有する印度學とを同日に談ずべきではないが、これ亦一つの參考たりうると思ふ。)

尙左表中には O. Strauss, J. J. Meyer, W. Ruben などの名が見られぬが、彼等はユダヤ人なるが故に、ナチス政權樹立後外國へ移つたとのことである。

Berlin	Heinrich Lüders (25, 6, 96) emer.	Ord. Prof.	
	Bernhard Breloer (8, 11, 94)	Ord. Prof.	
Bonn	Willibald Kirfel (29, 1, 85)	Ord. Prof.	
Breslau	Bruno Liebich (7, 1, 62) emer.	Ord. Prof.	
	Paul Thieme (18, 3, 05)	Doz.	
Erlangen			
Frankfurt a.M.	Hermann Lommel(7, 7, 85)	Ord. Prof.	
Freiburg i.Br.			

Giessen

Göttingen Emil Sieg (12, 8, 66) emer. Ord. Prof.

Ernst Waldschmidt (15, 7, 97) Ord. Prof.

Greifswald

Halle a.S. Wilhelm Printz (9,8,87) Nichtbeamt. Pf. ext

Hamburg Walther Schubring (10, 12, 81) Ord. Prof.

Heidelberg Hainrich Zimmer (6, 12, 90)

Nichtbeamt. Pf. ext.

(Max Walleser)

Jena

Kiel F. Otto Schrader (19, 3, 76) Ord. Prof.

Köln

Königsberg Helmuth von Glasenapp (8, 9, 91)

Ord. Prof.

Leipzig Johannes Hertel (13, 3, 72) emer. Ord. Prof.

Friedrich Weller (21, 7, 89) Ord. Prof.

Marburg i.H. Johannes Nobel (25, 6, 87) Ord. Prof.

München Wilhelm Geiger (21, 7, 56) emer. Ord. Prof.

Walther Wüst (7, 5, 01) Ord. Prof.

Münster(Westf.)

Richard Schmidt (29, 1, 69) emer. Ord. Prof.

Ludwig Alsdorf (8, 8, 04) Ord. Prof.

Rostock

Tübingen Jakob Wilhelm Hauer (4, 4, 81) Ord. Prof.

Würzburg

(Wiln E. Frauwallner)

註。emer.＝emeritiert (退職)

Ord. Prof.＝Ordentlicher Professor (正教授)

Doz.＝Dozent (講師)

教授名の次の括弧内の數字は生年月日。

四

これらの數多き諸教授はそれぞれの專門領域を有するが、佛教學に關する事項を取扱ふのは七・八名を出でない。しかし少くともすべての教授は佛教に關する一通りの智識と關心とは持つてゐるやうである。今佛教關係の教授を中心として、主要なる人々の研究狀況・講義題目・著書並びに訪問記などを併せ述べようと思ふ。

先づ伯林ではハインリヒ・リュダース教授（Prof. Dr. Heinrich Lüders）が斯學の大御所であるから、是非會見したい希望であつた。それ故日本學會のラミング教授やプロシャ翰林院のゲバイン女史の紹介狀などを調へ、訪問の都合を問合せた處、重い流行性感冒で病臥中の由で遂に會見する機を得なかつた。同氏は一九三九年の當時既に七十歳、大學の講壇からは退職してゐたが、プロシャ翰林院所藏の中亞將來の梵文寫本などについては、未だ自ら保管の任を去らなかつたので、ゲバイン女史なども同教授の許可を得なければならないと指圖してくれた。リュダース教授は中亞ツルファン將來の梵文佛典の斷片の研究において、夙に令名高く、その重なる著作は次の如くである。

H. Lüders: Bruchstücke buddhistischer Dramen, Kleinere Sanskrittexte, Heft 1. Berlin 1911.

——: Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā, Kleinere Sanskrittexte, Heft 2. Leipzig 1926.

——: Textilien im alten Turkistan, Abhandlungen der Preussischen Aka. der Wiss., 1936, Nr. 3. Berlin 1936.

——: Das Würfelspiel im alten Indien, Abh. der Ges. der Wiss. zu Göttingen, Phil.-histor. Kl., N. F., Bd. IX, 2. Berlin 1906.

伯林大學の現在の印度學正教授はベルンハルト・ブレレヤー教授（Prof. Dr. Bernhard Breloer）である。同氏は當時四十五歳、なか〳〵に政治的才幹のある人物に見うけられた。伯林チーゲル街二十八番、伯林大學東洋部の建物の地階にある Indogermanische Seminar に、私が同氏を訪問したのは一九三九年二月十六日であつた。同氏の專門は印度の法律學であり、カウティルヤに關する研究がある。しかし重要なる伯林大學の教授職たるには、研究成果の上からも經歷の上からもやゝ物足らぬ憾みがあるが、學方面の氣受がよければ御時勢の力の致すところでやむをえない。伯林大學の印度學は當時ブレレヤー教授一人で、外に助手が一人と學生は五人程であつた。同ゼミナールには三室あつて、其中二室は講義室或ひは

演習室であり、他の一室は教授の私室であつた。演習室には一通りの圖書・雜誌・辭書類などが備へられてゐるが、その數は餘り多くはないし、學生の勉强用の書籍を主としてゐた。その故は特殊な書籍や寫本などは、近くの國立圖書館に藏せられてゐるからである。一九三八—九年冬學期の講座は、梵語文法、Atharvaveda, Daśakumāracarita, Nyāyasūtra mit bhāṣya und vārtika の四講座であつた。私は同氏から佛教研究者たるノーベル教授・ワルドシュミット教授（特に同氏が小乘涅槃經の梵文斷片研究中の由）について種々聞くことをえたが、リュダース教授については尋ねたるも聞くことを得なかつた。同氏の著作は次の如し。

B. Breloer: Kauṭilya-Studien, I–III. Leipzig 1927–34.

I. Das Grundeigentum in Indien.

II. Altindisches Privatrecht bei Megasthenes und Kauṭilya.

1. Staatsverwaltung im alten Indien.

次にミュンヘン大學の現在の印度學教授はキュスト氏であるが、同地には未だ前任者たるウィルヘルム・ガイガー教授（Prof. Dr. Wilhelm Geiger）が住んでゐる。ガイガー教授は當時すでに八十三歳の老齢に達し、面會する機を得なかつたが、巴利語學の泰斗としてその令名はきはめて高い人である。彼は又第一次大戰後、獨逸における佛教運動にも「佛教學雜誌」を統率して大いに活躍した。その著作も可なり多いが、重なるものは次の如くである。

W. Geiger: Elementarbuch des Sanskrit, 3 Bde.

I. Teil, Grammatik; II Teil, Übungen und Lesestücke; III Teil, Wörterverzeichnisse. 2 Aufl. Strassburg 1909.

——: Pāli. Literatur und Sprache. Berlin 1916.

——: Literatur und Sprache der Singhalesen. Berlin 1901.

——: Saṅyuttanikāya ins Deutsche übertragen. München-Neubiberg 1925–30.

——: Mahāvaṁsa (Pāli Text). London 1908.

——: Mahāvaṁsa (Eng. Tra.). London 1912.
——: Cūlavaṁsa (Pāli Text), 2 vols. London 1925–7.
——: Cūlavaṁsa (Eng. Tra), vol. 1. London 1929.

尙彼の七十五歲を祝ふ次の記念論文集はキュスト教授によつて編まれ、多くの現存の印度學者の名を連ねてゐる。

Studia Indo-Iranica, Ehrengabe für Wilhelm Geiger. Leipzig 1931.

なほこの地には同じく前任教授として、ハンス・ウェルテル教授 (Prof. Dr. Hanns Oertel, 1868 生) がゐるとのことであるが、彼はアールヤ言語學の泰斗である。

さて現任のワルテル・キュスト教授 (Prof. Dr. Walther Wüst) は、一九〇一年生れで、當時未だ三十八の若年ながら、ミュンヘン大學哲學部の學部長の要職についてゐた。彼は勢力的な活動家であり、學的勞作も優れてゐるが、他面黨方面への政治的配慮も怠らない樣子に見受けられた。ミュンヘンは殊にナチス黨運動の本據であるから、大學などもナチスの一色に塗られてゐる。一九三九

年三月二十九日、私は大學の二二九號室卽ち哲學部長室に彼を訪ねたのであるが、中々に如才なき應接ぶりであつた。彼の專門は古代印度及び波斯の言語學的研究を主としてをり、その方面の研究を集大成した「古代印度語比較語源辭典」(Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch des Alt-Indoarischen [Altindischen]) は旣に第一卷(三分冊)が出版せられたが、全部で十五卷 (四十五分冊) といふ極めて尨大な野心的な著作である。彼には又吠陀の研究書もあり、將來の活躍を期待される學者である。又彼の語るところによれば、"Archiv für Religionswissenschaft" 誌の編者となつたから、この方面にも力を入れたいとのことであつた。彼の講座は古代中世のインドアールヤ語族及びインドイラーヌヤ語族に關するもので、梵語初步、Rāmāyaṇa, Mahābhārata, Veṭāḷapañcaviṁśatikā, Hitopadeśa 及び古代波斯語を講じてゐるとのことであつた。そして近代の印度方言學はアルエンドラ・シャルマ (Aryendra Sharma) といふ印度人が講じてゐる。學生は十二人で、外國人も四人ゐると

かいつてゐた。こゝの Indogermanische Seminar を見せてもらはうと思つて依頼したが、日本大使館の紹介が無いと困難であるといひ、本部へ問合せの結果、遂に見ることが出來なかつた。この邊の取扱ひ方はナチス式といふのか、あまりにはつきりしたやり方で、少々面喰つたが、ミュンヘン以外の大學ではかゝる場合に出會はなかつた。いづれも教授が自ら研究室に同道して、餘すところなく參觀せしめてくれた。從つてこの邊にもナチス・ミュンヘンの雰圍氣が感ぜられた次第である。キュスト教授の著作は次の如し。

W. Wüst: Stilgeschichte und Chronologie des Rigveda. Leipzig 1928.

——: Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch des Alt-Indo-arischen (Altindischen). Heft 1-3. Heidelberg 1936.

ライプチヒは「書籍の都」といはれ、世界の讀書人のメッカである。こゝの綜合大學はハイデルベルク大學に次いで、獨逸で第二の古い歴史を有し、第十五世紀の創立にかゝるといはれる。この地に於てウェッラー教授の許に自分は一年間卽ち二學期の間、梵文佛典などの講座に列したから、自分にとつて個人的には最も憶ひ出多き町であり、大學である。こゝの現任の印度學教授は佛教學を專門とするウェッラー教授であるが、同地には退職した先任教授としてヨハンネス・ヘルテル教授 (Prof. Dr. Johannes Hertel) が住してゐた。ヘルテル教授は印度の物語文學の研究に於て、獨歩の成績をあげた人であり、殊にパンチャタントラの研究は著名である。彼は大學の講壇は既に去つてゐたし、研究領域が餘りに距つてゐた爲に、訪問する機會もなかつたが、その主なる著作は次の如くである。

J. Hertel: The Pañcatantra of Pūrṇabhadra (Sanskrit Text) HOS. vol. 11. Cambridge Mass. 1908.

——: 〃 (Critical Introduction) HOS. Vol. 12. 1912.

——: 〃

(Parallel Specimens) HOS. Vol. 13. 1912.

——: 〃 (Tantrākhyāyika) HOS. vol. 14. 1915.

——: Ausgewählte Erzählungen aus Hemacandras Pariśiṣṭaparvan. Leipzig 1908.

ライプチヒ大學印度學の現任教授はフリードリヒ・ウェッラー教授(Prof. Dr. Friedrich Weller)である。彼は一八八九年生れで、當時五十歳、長身光頭、强い眼鏡の奥に靜かな柔和な眼を持ち、白象のやうな感じを與へられた。彼は故ウィンディッシュ教授に師事し、學位論文には、梵文「ラリタヴィスタラ」の本文研究をテーマとして、"Zum Lalitavistara" と題するものが出版されてゐる。その後一九三〇年頃、北京の燕京研究所に二年間勤務し、大寶積經迦葉品の梵藏並びに藏梵の索引を造つたりして、東洋的雰圍氣をもよく呼吸してをり、從つて支那・日本に關する理解も非常に廣いと見られる。彼はその間に多くの東洋の言語に通じ、梵語・巴利語・西藏語・支那語・蒙古語並び中亞の各種の胡語を取扱ひ、日本語も訓讀や會話はむつかしいが文章を讀んで大體の意味を理解するやうである。このやうに稀に見る言語的才能を具へ東洋研究者としての充分な基礎學の上に立つて、佛教の研究に從つてゐるのであるが、彼が殊に佛教の研究を中心とせることは、從來の著書を一覽しても明らかなところである。卽ち彼は早く漢譯の「諸法名義集」を研究し、「賢劫千佛名經」の梵・藏・漢・蒙・滿の五種對照本を出し、藏譯「佛所行讚」とその獨譯、藏蒙兩文の「梵網經」、前述の「迦葉品」の梵藏並びに藏梵の索引などを發表し、近くはソグド語の「維摩經」や三昧經典の研究にも及んでゐる。その間「大亞細亞誌」(Asia Major)の編輯に從事し、又「東洋學文獻誌」(Orientalistische Literaturzeitung)には毎號の如く新刊書の批評紹介を載せてゐる。其中後者に載せられた荻原土田兩氏校刊の「梵文法華經」に對する學的に優れた鋭利な批評や、東北帝大の「西藏大藏經總目錄」に對する好意ある紹介的な批評など、我々日本人として好感を以て迎へたところである。

一九三八—九年冬學期における印度學の講座は、R.

veda, Mahābhārata, Śakuntalā, Saddharmapuṇḍarīkasūtra(Sanskrit, Tibetisch und Chinesisch)の四であり、一九三九年夏學期には Ṛgveda, Meghadhūta (Sanskrit und Tibetisch), Mahāvastu, Sanskrit Grammatik の四であつた。研究室には助手としてディーツ君(Dr. Dietz)が居て、いろ〳〵世話をしてくれたが、彼も漢譯長阿含經などを苦心して、讀んでゐた。こゝの專攻の學生は一人、他に一人の老人と一人の婦人とが講義に出てゐた。こゝの研究室は街の中の一般の建物の二階にあつて、階下は本屋であつた。研究室として二室、他に講義室として一室あつたが、講義室は隣りのスラヴ研究室及びエヂプト研究室との共通のもので、設備は概してよくない。こゝも亦書籍の數は餘り多くないし、佛教關係のものや巴利聖典などは少なかつたが、若し必要の際には大學圖書館へ一歩運べば、大正藏經や、東洋學の各種の雜誌の完備せるバックナムバーなどを見ることも出來るし、借出すことも出來る。又この圖書館にない書物は、獨逸國内の他の大學圖書館における有無を調査して、若し有れば僅かの費用で一定期間借用することも出來る。かゝる組織の完備せることは驚嘆の外はないが、勿論これは一朝一夕にして急ごしらへしたものではない。惟ふにこれは行政上には勿論、生活の各部面における獨逸人の統一ある組織の網の目の一點に觸れたにすぎないのである。

さてウェッラー教授を初めて訪ねたのは一九三八年九月十五日であつた。簡素な住居に廣い書齋、その窓からはシュテファン通をへだてゝ、青々と樹の茂つたタールの低地が見渡された。書齋に通されておびたゞしい藏書の數にも目をみはつたが、印度學者としての一通りの書籍の外に、蒙古關係の書籍、支那・日本に關する書籍も多く、大正藏經は勿論眞宗全書等をも備へてゐるのには一驚した次第である。別室には西藏の圖像なども見られたが、これは北京で入手したものであらう。自分は訪獨の意圖を述べ、谷大學長と伯林日本學會のラミング教授との紹介狀を渡し、履歴書などを示し、近作の「梵文和譯十地經」と「印度佛教史概說」とを呈上した。同氏は先づ獨逸流に握手を求めて感謝の意をあらはしてから、

東洋の風習にも幾分通じてゐることゝて、呈上した書物を押戴いたりして喜びの情を示してゐた。その翌日には自ら大學へ同道して、聽講生としての入學手續を尋ねてくれたりして、不自由な異國の旅人にとつては、心を盡した彼の親切は誠に心に沁み入る底のものであつた。次に彼の重なる著作を掲げておく。

Fr. Weller: Der Chinesische Dharmasaṅgraha. Leipzig 1923.

——: Tausend Buddhanamen des Bhadrakalpa, nach einer fünfsprachigen Polyglotte. Leipzig 1928.

——: Zum Lalitavistara (Inaugural Dissertation) Leipzig 1915.

——: Das Leben des Buddha von Aśvaghoṣa, Tibetisch und Deutsch, 2 Tle. Leipzig 1926-8.

——: Brahmajālasūtra, Tibetischer und Mongolischer Text. Leipzig 1934.

——: Index to the Tibetan Translation of the Kāśyapaparivarta. Harvard Sino-Indian Series, vol. I. Cambridge Mass. 1933.

——: Index to the Indian Text of the Kāśyapaparivarta. Harvard Sino-Indian Series, vol. II, Pt. 1. Cambridge Mass. 1935.

——: Bemerkungen zum soghdischen Vimalakīrtinirdeśasūtra. Asia Major, X, 2. Leipzig 1935.

——: Zum soghdischen Vimalakīrtinirdeśasūtra. Abh. für die Kunde des Morgenlandes, XXII, 6, Leipzig 1937.

ボン大學の印度學は、一八一八年にウィルヘルム・シュレーゲルが獨逸に於いて最初に開設した古い歴史に輝き、且つ前任教授であつたクルマン・ヤコービ教授は稀に見る大學匠であつたから、ボン大學の一つの誇るべき存在であつた。そして現在はウィリバルト・キルフェル教授(Prof. Dr. Willibald Kirfel)の司るところであるが、前代の輝かしさに比べて、幾分凋落の色なきをえない。キルフェル教授は一九二九年當時、五十四歳の學者として最も働き盛りであつた。同地日本學の講師であるオス

カー・クレッスラー教授に伴はれて、梵語・アラビヤ語・ペルシャ語・エジプト語・支那語・日本語などのゼミナールが一つの建物に集つてゐる東洋學研究所に、自分は同年四月三日にキルフェル教授を訪ねた。同氏は中背でよく肥え、愛嬌のある氣輕な人であつた。研究室の内容はいづれも大體似てゐるから、とりたてゝ言ふこともない。同氏は印度の古傳話(プラーナ)などの研究を專門とし、この方面の大著も存するが、こゝでの講座は、梵語初步、梵語高等 (Pāṇini), プラークリット (Jacobis Ausgewählte Erzählungen im Mahārāṣṭrī), 印度醫學書の講讀などであり、同氏の外に Dr. Losch といふ講師がゐる由。キルフェル教授の重なる著作は次の如くである。

W. Kirfel: Das Purāṇa Pañcalakṣaṇa. Bonn. 1927.

——: Die Kosmographie der Inder nach den Quellen dargestellt. Bonn u. Leipzig 1920.

——: Verse Index to the Bhagavadgītā. Leipzig 1938.

次にマールブルク大學の現任教授ヨハンネス・ノーベル教授(Prof. Dr. Johannes Nobel)を、一九三九年四月六日にその自宅に訪問する機會を得た。大體このマールブルクの町は、ラーン川の右岸にある靜かな大學都市で、うしろに山をひかえ、山の上には古い城があり、大學の建物も山に依つて建てられてゐる。この地は土地の風俗も鄙びてをり、長いスカートをはき肩へ大きな肩掛の如きをかけた、古風な田舍味を帶んだ女達も見られる。ナチス色の餘り浸みこんでゐない寮園氣は、街の模樣にも、大學の空氣にも見られる。日本では獨逸西南學派の哲學の榮へた地として夙に知られてゐる。このやうな寮園氣と歷史とは異國の遍歷者の心を和やかにしてくれ、ライプチヒの次にはこゝに一年間住まうかと考へさせる迄に、自分の氣に入つたのであるが、ノーベル教授に會ふに及んで、同氏の人柄がこの町そのもの以上にも、一層親しく懷しく感ぜられた。しかし種々の事情からこの町に住みたいといふ希望は實現されなかつたが、今でも快い回想を以てノーベル教授とマールブルクの町とを憶ひ起すことができる。

さてノーベル教授は當時五十二歲、割に背の低いづん

ぐりした人であつた。米を食ひたがる東洋人を喜ばす爲に、特にカレーライスを用意して迎へて下さつた教授の好意には全く恐縮する外はなかつた。同地には以前日本人の留學生も多く、北山淳友兄は二年間同教授に漢譯經典などを指導したといふから、日本人に對しては特に親しみを持つてゐるやうに見受けられた。このことは、この時たま〳〵來合せた一人の印度人（カルカツタ大學講師で Dr. Ray といふ人）に對する樣子から考へても、覗ふことができた。印度學者が、印度人そのものよりも日本人を親しむ氣持、これも偶然でないやうな氣がする。同氏は大學の本館とは別にある東洋學研究室の中の Indo-Germanisches Institut へ我々を案内せられた。

こゝは藏書の數が目立つて多く、雜誌類も豐富であるが、佛教のものは割に少ない。次に宗教史研究室も氏の管轄するところであり、一々鍵をあけて見せてもらつたが、内容は未だよく整備されてゐないが、日本の佛教に關するものも相當あり、これらは前任のルドルフ・オットー教授が訪日の際に集めたとのことである。

彼の一九三八—九年冬學期の講義は、梵語文法、リグヴェーダ、老子道德經、西藏文典籍の講讀であつた。彼は久しく印度にあり、印度の詩學に關しても造詣が深いが、最近一九三七年に、優れた「梵文金光明經」の校訂本を出版して、佛教言語學者としての色彩を明らかにした。この書は數種の梵文寫本の外に、中亞出土の古い貝葉寫本の斷簡を利用した點に特色が見られ、その他藏・漢譯も勿論對照して校訂し、豐富な脚註が施されてゐる。同氏の書齋で、金光明經の西藏譯及び註釋、藏・獨・梵の索引の原稿のすでに完成せるものを見たのであるが、その出版の容易ならざるを嘆いてゐられた。彼の學者的氣質に深い尊敬と好意とを寄せると共に、將來の成果を期待せざるをえなかつた。その著作としては次の如くである。

J. Nobel: The Foundations of indian Poetry and their historical Development. Calcutta 1925.

——: Das Suvarṇabhāsottama-sūtra. Leipzig 1937.

ノーベル教授を訪ねた翌日、四月七日に、ゲッティンゲンの彼の自宅において、エルンスト・ワルドシュミッ

ト教授（Prof. Dr. Ernst Waldschmidt）に會ふことができた。彼は當時四十二歳、三年前からこの地の印度學教授となつた由で、その前には伯林の民族博物館にあつて、中亞ツルファン將來の佛教關係の古文書や、壁畫類などを取扱つてゐた。即ち古文書に就いてはリュダース教授の指導をうけて梵文佛典の斷片を研究し、梵文比丘尼戒本（有部所傳）と梵文の阿含の數經とを出版してをり、又壁畫類に就いてはグリュンウェーデル教授の研究を補佐し、且つその歿後、「中亞に於ける佛教的中古藝術」（Die Buddhistische Spätantike im Mittelasien）の第七卷を完成してゐる。尙近く梵文の小乘涅槃經の斷片研究も完成する由であり、現在の大般涅槃經の大約四分の三にあたる梵文斷片が發見されたとのことである。これは梵語・巴利語・西藏譯・漢譯（漢譯のみは獨逸譯）の四種對照といふ形で出版される筈であり、その既に完成された原稿を呈示されたが、恐らく本文五・六百頁、序論百頁に達する大冊となるであらう。

彼は一九三二—四年の間、印度各地を自家用の自動車で旅行したさうであり、ヒットラーの"Mein Kampf"の英譯初版を印度で買つてきたとて、見せてくれた。この日にも自ら車を操つて、印度學研究室と支那學研究室とへ案内してくれたが、こゝの印度學研究室は廣くて書籍の數も非常に多い。雜誌類も一室に揃へられ、寫眞の現像などを行ふ部屋もある。一九三八—九年冬學期の講座は、梵語初步、容易な梵文原典、巴利語佛典、リグヱーダの講讀、及び講義として「印度の國土及び民族學」であつた。支那學研究室も同樣によく設備せられ、支那に關する歐米人の著作が非常に多く、唐本も澤山あり、大正藏經もあつた。

ゲッティンゲン大學の印度學の前任教授たるエミール・ジーク教授（Prof. Dr. Emil Sieg）が、こゝに住んでゐるので案内してもらつたが、ジーク教授は當時七十三歳の高齡にも拘らず、なほトカラ語の研究に從事してゐる篤學な學者である。白髮長身、見るからに典型的な學者タイプの人であつた。彼にはジーグリンク教授（Prof. W. Siegling）との共著として、トカラ語の文典（Tokha-

rische Grammatik, Göttingen 1931) その他の著作がある。なほこゝにはフィック教授 (Prof. R. Fick) も住んでゐる由であるが、時間の都合上訪ねる暇を有しなかつた。

私がワルドシュミット教授を訪ねた日は、恰も Karfreitag) 復活祭前週の金曜日)の祭日で、商店はすべて休み、街々は人通りもない位に靜かであつた。元來ゲッティンゲンは小さい大學都市であり、靜かな町であるが、この日の朝の靜けさには多少驚いた。そして教授の宅を午前九時頃に訪ねて、初めて祭日であることを知つたのである。教授の住居もこの町に相應しい靜かな町端れにあり、庭が廣く瀟洒な建物も氣に入つた。家族は夫人と十二・三歳の男の子と母親とであつて、靜かな家庭のあたゝかい雰圍氣が、旅人の心情を柔かくつゝんで慰められるところが多かつた。同氏は日本の佛教學者の名前などをしきりに尋ね、非常に關心を持つてゐるやうに見受けられた。この日も、ノーベル教授を訪ねた前日と同じやうに、私には意義深い忘れがたい一日となつたのである。同教授の著作表を次に掲げておく。

E. Waldschmidt: Das Legend des Buddhas.

——: Buddhistische Spätantike im Mittelasien, 7er Band. Berlin 1933.

——: Gandhara, Kutscha, Turfan. Leipzig 1925.

——: Bruchstücke des Bhikṣuṇī-Prātimokṣa der Sarvāstivādins in den verschieden Schulen, Kleinere Sanskrittexte, Heft 3. Leipzig 1926.

——: Bruchstücke buddhistischer Sūtras aus dem zentralasiatischen Sanskritkanon 1, Kleinere Sanskrittexte, Heft 4. Leipzig 1932.

東プロシャの都ケーニヒスベルク大學の印度學は、ヘルムート・フォン・グラーゼナップ教授 (Prof. Dr. Helmuth von Glasenapp) の司るところである。當時東方ボーランド國境地方は、物情騷然として遊子の遍歴を許さなかつたから、同教授に會見する機を得ることができなかつた。同教授は印度の宗教思想の研究を主とせる人で、婆羅門教・佛教・耆那教・印度教に關する概說的な大部の著作があり、その他部分的研究も多く、印度の宗教藝

術に關する寫眞集などもある。とにかく各方面にわたつて多數の啓蒙的作品が著はされてゐるが、重なるものを列記すれば次の如くである。彼の講座も一九三八—九年冬學期には、印度歴史、梵語文法、カーリダーサ、中世印度及び近世印度の原典、古代及び現代印度の諸問題、と掲げられ、相當派手な人柄がうかゞはれると思ふ。

H. von Glasenapp: Der Jainismus. Berlin 1925.

——: Der Hinduismus. München 1922.

——: Madhva's Philosophie des Vishnu-Glaubens. Bonn u. Leipzig 1923.

——: Brahma und Buddha. Berlin 1926.

——: Heilige Stätten Indiens, Die Wallfahrtsorte der Hindus, Jainas und Buddhisten, ihre Legenden und ihr Kultus. München 1928.

（尙、佛教に關する著作あるも、原書名を記憶せず。）

マックス・ワッレーザー教授(Prof. Dr. Max Walleser)の名は、中論の獨譯者として、又大乘佛教の研究者として、我國の佛教研究者の耳に親しいものである。彼はハイデルベルク大學に居ると聞いてゐたから、一九三九年三月獨逸國内の旅行の際に訪ねようと思つて、ウェッラー教授からの紹介狀と共に、訪問の都合を問合せた。ところが殘念ながら、彼は健康を害して他の地に療養中であるから、面會は不可能である由の返事を受取つた。やむをえないことである。彼の名は一九三八—九年の獨逸の全大學の講座表にも見られなかつたから、恐らく相當長い間の病氣らしい。聞くところによれば、彼はハイデルベルク大學では正教授の職に就任しないで去つたとのことである。彼はすでに早く羅什譯の中論と西藏譯の無畏註とを獨譯して、獨逸の思想界へ紹介し、彼の佛教學者としての名を高めたのである。又佛護の「中論註」、淸辨の「般若燈論」の校訂出版も始めたが、完成されなかつた。他面原始佛教及び部派佛教にも研究の手を延してゐる。彼は又「佛教學術資糧叢書」(Materialien zur Kunde des Buddhismus)を主宰して、一九三二年迄に、全十九卷を出版してをり、更に一九三〇年に「佛教學年報」(Jahrbuch des Instituts für Buddhismus)を創刊した

が、これは惜しくも第二卷で休刊してゐる。彼は現在恐らく七十歳に近い老齢であらう。とにかく獨逸の佛教研究において大きな一石を投じた存在であつたが、惠まれない經歴の所有者であつたと想像される。彼の主要な著作は次の如くである。

M. Walleser: Die mittlere Lehre des Nāgārjuna nach der chinesichen Version übertragen. Heidelberg 1911.

——: Die mittlere Lehre des Nāgārjuna nach der tibetischen Version übertragen. Heidelberg 1911.

——: Die philosophische Grundlage des älteren Buddhismus. Heidelberg 1925.

——: Die Sekten des alten Buddhismus. Heidelberg 1927.

——: Buddhapālita, Mūlamadhyamakavṛtti (Tib.), fascs. I–II. Bibliotheca Buddhica XVI. St. Petersburg 1913–4.

——: Bhāvaviveka, Prajñāpradīpaḥ (Tib.), fasc. I. Bibliotheca Indica. Calcutta 1914.

——: Die Streitlosigkeit des Subhūti. Heidelberg 1912.

——: Das Edikt von Bhabra. Leipzig 1923.

——: Nochmals das Edikt von Bhabra. Heidelberg 1925.

ハイデルベルク大學印度學の現任教授はハインリヒ・チムマー(Prof. Dr. Heinrich Zimmer)である。彼は未だ正教授ではなく、又特に優れた研究のあるを聞かない。

H. Zimmer: Altindisches Leben.

——: Ewiges Indien. Leitmotive indischen Daseins. Potsdam 1930.

又ウィーンにはフラウワルナー教授(Prof. Dr. E. Frauwallner)があつて、大乘後期の論書や正理學派關係の作品を取扱ひ、その成果は先進の「維納東洋學術雜誌」にしばゝ發表されてゐる。これらの困難な文獻をよく讀破し、すぐれた成績を擧げてゐるが、彼は未だウィーン大學の教授職には就いてゐないさうである。又著書のある

ことも聞いてゐない。

最後にハムブルク大學のワルター・シュブリンク教授(Prof. Dr. Walther Schubring)について記るしたい。彼は當時五十八歳、極めて篤實な耆那教研究者である。かの耆那教の苦行主義の精神が、彼自らの思想に影響するところなしとは斷言しがたい。既に早く「大雄の言葉」といふ耆那教祖の言葉を獨譯して集めた作品があつたが、最近に「耆那教の教理」といふ組織的な著作を發表した。これは彼が耆那教研究の第一人者たることを確立した著作であつて、原始耆那教の綱要書として不可缺の書となつた。實に彼はヤコービ教授以後、最も本格的な耆那教學者である。

一九三九年六月二十七日、私はハムブルク大學日本學の講師をしてゐた堀岡智明兄(高野山大學出身)に案内されて、大學内の印度學研究室に彼を訪れた。彼は痩せ形の溫好な紳士であり。以前に日本の印度研究者の留學した人々の噂などで話は盡きなかつた。こゝの印度學研究室は半分地下に入るやうなやゝ陰鬱な部屋構えであつたが、その藏書類は相當に多く、最も嬉しかつたのは同教授の親切な人柄であつた。一九三八—九年冬學期の彼の講座は、梵語文法、梵語講讀、プラークリット講讀などであつた。

W. Schubring: Das Kalpasūtra. Leipzig 1905.

——: Worte Mahāvīras. Göttingen u. Leipzig 1926.

——: Die Jainas, Religionsgeschichtliches Lesebush. Tübingen 1927.

——: Die Lehre der Jaina nach den alten Quellen dargestellt. Berlin und Leipzig 1935.

以上で關係諸教授に就いての素描を終つたが、その外にもなほ數名の印度學者が存する。彼等については極めて簡單に述べたい。先づ、リヒャルト・シュミット教授(Prof. Dr. Richard Schmidt)はミュンスター大學の前任教授で、經書(スートラ)などの研究もあるが、一般には獨譯「カーマスートラ」(Kāmasūtra. Berlin 1920)や「印度性愛學資料」(Beiträge zur indischen Erotik, 3 Aufl. Berlin 1922)などの著者として知られてゐる。又「僧と僧道」(Fakire

und Fakirtum, 2 Aufl. Berlin 1921) の著もある。同地の現任教授は以前に伯林大學の講師であつたルードヰヒ・アルスドルフ (Prof. Dr. Ludwig Alsdorf) である。彼にはアパブラランシャ語などの印度俗語に關する研究書 (Apabhraṁśa-Studien. Abh. für die Kun de des M., XXII, 2. Leipzig 1937.) がある。

次にチウビンゲン大學のヤコーブ・ヰルヘルム・ハウァー教授 (Prof. Dr. Jakob Wilhelm Hauer) は、瑜伽(ヨーガ)に關するすぐれた研究があり、又ヴラートヤに就いても詳密な研究を發表し、注目すべき學者である。卽ち左の二書である。

J. W. Hauer: Die Anfänge der Yoga-Praxis im alten Indien. Stuttgart 1922.

——: Der Vrātya. Stuttgart 1927.

又北方のキール大學にはオットー・シュラーデル教授 (Prof. Dr. F. Otto Schrader) が居る。彼は印度思想史を專門とするらしいが、早く「佛陀及び大雄時代の印度哲學の立場に就いて」(Über den Stand der indischen Philosophie zur Zeit Buddhas und Mahāvīras. Strassburg 1902) といふ小冊子及び「宗教史讀本」叢書の中に「印度教」(Der Hinduismus, Religionsgeschichtliches Lesebuch, 2. 2 Aufl. Tübingen 1930) の綱要書を發表したる外、寡聞にして未だ他の著作あるを知らない。

東方のブレスラウ大學には、當時既に七十七歳に達した前任教授たるブルーノー・リービッヒ教授 (Prof. Dr. Bruno Liebich) が居た。彼はパーニニに關する研究を以て知られ、非常に古く名著「パーニニ」(Pāṇini. Leipzig 1891) を發表してゐる。現在はパウル・ティーメ (Prof. Dr. Paul Thieme) が講師をして居るが、彼も亦梵語文典に關する研究者であるらしく、その方面の發表として次の著作がある。

P. Thieme: Pāṇini and the Veda. Allahabad 1935.

又中部獨逸のハレ大學にはヰルヘルム・プリンツ教授 (Prof. Dr. Wilhelm Printz) が居る。彼は梵語學を專門とする學者である。

更にフランクフルト大學にはヘルマン・ロムメル教授

(Prof. Dr. Hermann Lommel)が居るが、彼については如河なる方面の研究者であるかを知らない。

上述の如き各綜合大學關係の諸教授の外、圖書館・研究室關係に、或ひは民間に、印度學關係の研究者乃至好事家は相當にあると思ふが、彼等を一一こゝに述べる要はないであらう。その中目ぼしい人しては、ゲッシェン叢書中の「佛教」(Der Buddhismus, 2 Bde, 2 Aufl. 1920-2)二卷の名作で知られるヘルマン・ベック氏(Herr Hermann Beckh)があり、又新進の學者として伯林のプロシャ翰林院にゐるホフマン氏(Herr Dr. H. Hoffmann)は、最近長阿含經中のアーターナーティヤ經の中亞出土の梵文斷片を整理研究して、次の一書を發表してゐる。

H. Hoffmann: Bruchstücke des Āṭānāṭikasūtra aus dem zentralasiatischen Sanskritkanon der Buddhisten. Kleinere Sanskrittexte, Heft 5. Leipzig 1939.

上來粗雜な記述ながら、滯獨中の記錄などを混へて、獨逸における印度學の現狀を述べた次第である。この拙文が、斯學に關心を有する諸氏に何等かの參考ともならば、筆者の幸甚とするところである。

(昭和一六・七・二八、入鹿池畔の山莊にて記す。)